

第28圖 しやうじ
やうばかまノ畸形

ツク。

18. しやうじやうばかま *Heloniopsis grandiflora*

FRANCH. et SAV. ノ四子房品 正常形ノしやうじやうばか
まハ $P_{3+3} A_{3+3} G_{(3)}$ デアルガ、第28圖ニ示スモノハ $G_{(4)}$
デアル。コノモノハ子房ニ變化ガアツタノミデナク、花梗
及ビ花莖モ異狀ヲ呈シテアツタ。即チ圖ニ見ル様ニ發育花
セル花梗ハ、著シク長ク且ツ太ク、殆ンド花莖ノ太サニ匹
敵シ、發育セザル花ノ花梗ハ著シク短カク、各節間ハ長ク
ナツテアツタ。花梗ノミ有ルモノハ、私ノ花ヲ摘ミ取りタ
ルモノデアル。

雜 錄 Miscellaneous

滿蒙ノまたたび (其四)

高 橋 基 生

M. TAKAHASHI: Stories and gossips in my journey
through Manchoukuo (IV)

五時ニ出發シテ八時ニ到着シタ承德入リノ「トラック」行進ハ正ニ十五時間ノ難行デア
ル。承德ノ宿舍ニ腰ヲ下シテモ、更ニ床ニモグリ込メサヘ未ダ身體ノ振動ガヤマヌ。ソ
レハ恰モ荒天ヲ乗り切ツテ汽船カラ上陸シタ時ノヤウデアル。勿論振動數ノ點デハ前者ガ
遙カニ優ツテキル。兎ニ角コレガ筆者ノ自動車旅行ノ最長記録トナツテキル。但シ二時間
ニ一回位ノ用タシガテラノ停止ト、中食ノ一時間ハ平泉ノ町ニ停車シタノデアルカラ丸十五
時間ト云フ譯デハナイ。平泉ノ町ニ於ケル中食後50分ノ町内見物、ソレハ餘リニモ「スピ
ード」的デハアツタガ、大キナ見付ケ物が喉ニブラ下ツテキタ。實際内地等デハ一生ニ一回
サヘ見參ニ及ビ兼ねル見事ナ見物デアル。然モ何故ニ甲状腺ガ斯ク腫レ上ルカハ未ダ學界
ノ疑問トサレテキル。コノ罹病率ハ最モ甚ダシイ處デハ約50%ニ上ツテキル。概シテ熱河
ノ中部ヨリ南部地方ニ多ク、總數無慮數萬ニ及ブト言ハレテキルカラ將來一問題トナラウ
ト思ハレル。罹病者ニ就イテ尋ネテ見ルト、多少聲ヲ出シ難イコト及ビ懷工合トハ無關係
ニ首ノ廻リガ惡イコトガ缺點デハアルガ、生命ニハ餘リ關係ガナイラシイ。去ル在留邦人

ノ話デハ水質ト大ナル關係ガアルトイフガ、眞カ偽カ。何ンデモ熱河討伐ノ折、吾ガ軍人ニモ一人ノ患者ヲ出シタサウデアルカラ、オ互モ仲々油斷出來ヌ譯デアル。毎朝起キルト先ヅ顔ヲ洗フヨリ前ニ喉ヲ撫デテ、今日一日ヲ祝福スルノデアル。トコロガ或ル朝一番氣ニシテキタ某氏ノ喉ヲ何レハ惡戯好キノ南京蟲ノ仕術デアラウガ、何レニシロ殺生ナ蟲デアル。寝テイル間ニ一寸刺シテ置イタカラ一大事、目醒メル早々上ヲ下ヘノ大騒ギガ持テ上ツテシマツタ。

平泉ヲ離レルト道ハ愈々七老岡山脈ヲ目指シテ上下スルコトハナル。ツヒ嚮頃某商行ノ「トラツク」ガ襲撃サレタトイフ六溝ノ部落端レハ成程薄氣味が悪い。水成岩層ガ狂人ノ手習ヒノヤウニ盛り上ツテハ切り下リ、奔放ノ限リヲ盡シテキル。曰ク、月牙山、曰ク筆架山、曰ク鷄冠山ト。

コノ日午前中ニハ承德一圓ヲ大雷雨ガ襲ツタサウデ、天頂山手前ノ谷合ヒ等ハ文字通り車軸ヲ沒シテ、「エンジン」ガ時々悲鳴ヲ舉ゲル始末デアル。ソレデモ峠ニカ、ツテ洗ヒ出サレタ岩面ヘ來ルト車ノ浮キ腰ガガツシリト落チ着イテ、遅イ乍ラモ確實ナ前進ニ移リ始メタ。天頂山ノ峻、流石ノ川原挺身隊ヲ惱ミニ惱マシタダケアツテ、物凄イ自動車越エデアル。谷間ハ既ニ夕色ニ鎖サレテ當時顛落シタトイフ自動車ノ殘骸ガ薄黒ク蹲ツテ自ラ鬼氣ヲ發散シテキル。

町ノ灯ガ見エル。ソレハ人里ヲ離レテ遠ク旅行スル人ニ取ツテハ、誰シモガ一度ハ必ズ經驗スル歡喜ニハ違ヒナイガ、故國ヲ離レテ遠キ滿蒙ノ涯ニ於テハ又格別ナ感動ガ涌イテ來ル。夕靄ニ晒サレテ武烈河畔ニ、渡船待ツ間ノ一時ノ佗シサモサルコト乍ラ、出迎フ筈ノ先發隊ノ無消息ニモ一同ノ焦慮ノ種子ハ盡キナイ。併シ何ト言ツテモ心ノ奥底ニ微カニ舉ル「承德」「承德」ノツバヤキノ中ニハ何カシラ一抹ノ心強サガアル。コノ心ハ決シテ「溺レル者ハ藁ヲモ捌ム」トイツタヤウナ我武者羅ナモノデハナイ。低調デハアルガ底深イ雄叫ビデアル。

由來承德府ハ清朝歷代ノ帝王ガ其ノ離宮トシタ處デ、人モ知ル如ク、今回御來訪ニナツタ



Fig. 48. 夢ニハ某氏ヲモ惱シタ見事ナ甲狀腺腫

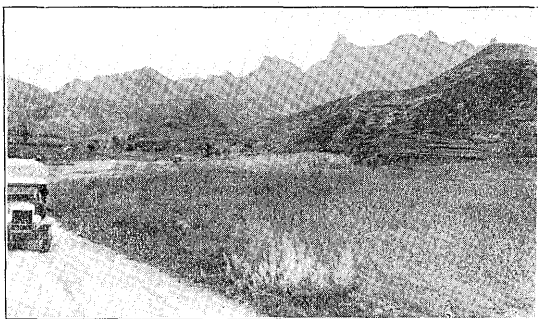


Fig. 49. 六溝端レノ懸崖ナル山容（著者撮影）



Fig. 50. 斷崖雲ヲ呼ブ天頂山ノ險路 (著者撮影)



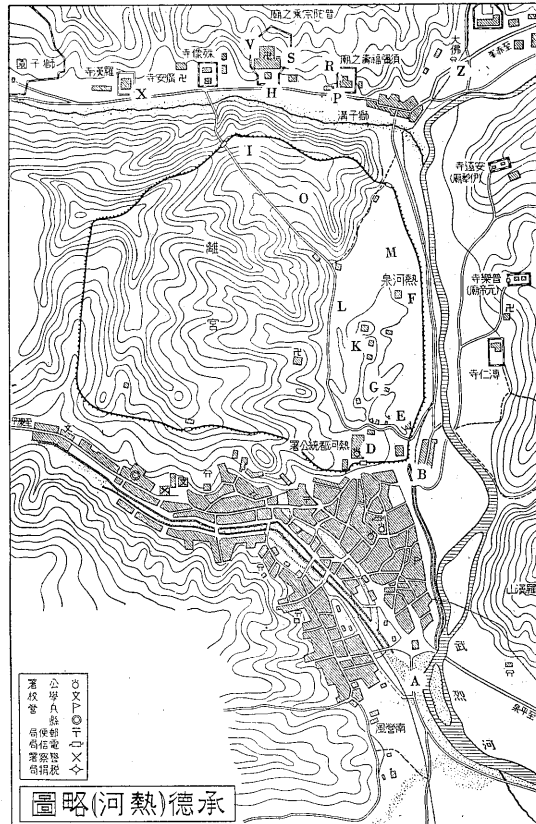
Fig. 51. 昔々ラノ天頂山越エ (著者撮影)

滿洲國皇帝ノ御先祖ニ當ル康熙帝ガ今カラ約二百四五十年以前ニ當ル康熙四十二年ニエヲ起サレテ、丸六年ノ歲月ヲ費シ同四十七年ニ至ツテ略々體裁ヲ成シタモノデアツテ、帝ガ詔シテコノ離宮ヲ避暑山莊ト命名サレタノモコノ年ノコトデアル。元來帝ガコノ地ヲ撰ンデ壯麗無比ナル行宮ヲ造營サレタニハ、何カ深イ魂膽ガナケレバナラナイ。即チ承德府誌ヲ繙イテ「康熙四十二年避暑山莊ヲ肇建シ、時巡展觀臨朝聽政ノ處ト爲ス」トアルノヲ見ルトキ其ノ間ニ深ク藏サレタ意圖ノ一端ヲ看取出來ルノデアル。

惟フニ承德ノ地ハ陰山山系ノ流レヲ掬ム七老圖山脈ノ險峰ニ圍繞セラレテ、自然ノ要害ヲナスノミデナク。灤河ノ流ニ掉セバ、僅カ二日ニシテ河北省灤州ニ達シ得ルシ、陸路、北京ニ赴クトシテモ優ニ五日ノ行程ニ過

ギナイ。然モ北部蒙古ニ通ズル最捷路ヲ扼シテキル等、交通上ノ一大要衝タルコトハ見逃セナイ。且ツ又一朝有事ノ際ニハ清朝ノ故地デアル滿洲ノ地ヲ控ヘテキルノデ、滿蒙兩民族ヲ糾合シテ、敵ニ當ルニハ絶好ノ土地柄ト言ハネバナラナイ。元來清朝ハ北方ノ小數民族タル滿洲族カラ立ツテ、其ノ數ニ於テハ數十倍ニ當ル漢民族ニ君臨シタ關係上、清朝保全ニ資スル準備工作ハ實ニ周到ヲ極メテキル。第一、其ノ創業ノ際ニ犬馬ノ勞ヲ執ツタ內蒙古諸旗ヲ所謂內蕃トシテ懷柔スル迄ニハ、陰ニ陽ニ並々ナラヌ苦心ガ拂ハレテキル。即チ承德離宮ノ造營ト言ヒ、喇嘛八大寺ノ建立ト言ヒ、夫々コノ政策遂行上ノ礎石トシテ重要ナル役割ヲ果シテキル。偉人創業ノ先見ガの中スルコトハ獨リ日本史ノ良ク教フル處トハ限ラナイ。幸カ、不幸カ、清朝末期ニ於ケル西太后ノ熱河蒙塵ハコノ間ノ事情ヲ如實ニ物語ツテ餘リアルモノデアル。斯ル偶意ノ下ニ築カレタガタメニ、其ノ結構ノ如キモ單ナル行宮デハナイ。周圍十六支里ニ亘ツテ、先ヅ石ヲ疊ンデ垣ヲ繞ラシ、其ノ上ニハ雉堞ヲ加ヘル等、外壁ノ構造ヲ始メトシ、凡テガ紫禁城ノ制ヲ襲用シテキル。而シテ帝ハ毎年五六月ヨリ八九月頃迄、コ

コニ駐蹕シ、或ハ木蘭園場ニ鎮武狩獵ヲ催シテ、蒙古諸王ニ武威ヲ示シ、或ハ蒙古民族ノ喇嘛教尊信ノ厚イコトヲ利用シテ豪壯無比ナル喇嘛寺ノ造營ヲ分擔寄進セシメテ、彼等ノ財政ノ調節ヲ計リ、將又成吉思汗以來ノ勇猛無畏ナル氣象ノ柔化ニ資スル等、我ガ徳川幕府ノ諸政策ト對照シテ、覇業ヲ創メシル者ノ共通的意圖ヲ窺フコトガ出來ル。但シ康熙帝ハ單ナル經世家ヤ、武弁デハナイ。詩文ニ長ケテ承德ノ景勝ヲコヨナク愛デラレタコトモ事實デアル。ソレ故帝ノ詩囊ニ入り、畫心ニ觸レタコノ地ハ單ニ其ノ自然ノ勝、人工ノ美ヨリスルモ滿洲國ノ京都ト稱シテモ差支ヘナイ。處ガ、其ノ青史ヲ省ミテ彼此再考スル時ハ愈々其ノ然ル所以ガ首肯サレル。即チ、東山三十六峯ノ靜寂ヲ擧ゲテ尊王攘夷ノ垣塙ニ投ジ、維新日本ノ鑄型ニ流シ込シタト見ルナラバ、清末カラ滿洲國ノ創立ニ到ル迂餘曲折ニ織リ込マレタ承德ヲ繞ル山々ハ、今京都ノ名ヲ聞イテ生氣一番、感慨無量デアルニ違ヒナイ。鴨ノ清流？ニ比ス可ク、武烈河ノ流アリ、東ニ磬垂、羅漢、天橋、五指ノ秀峯峙チ、西ニ風雲、廣石ノ諸嶺ヲ控ヘ、南ニ僧冠、青松、鳳凰ノ群峯踞リ、北ニ獅子嶺、大黑山ガ枕スルト云フ、山河ノ布置ニ到ル迄正シク京都デハナイカ。



圖中ノ羅馬字ハ挿入寫眞ノ位置ヲ示ス

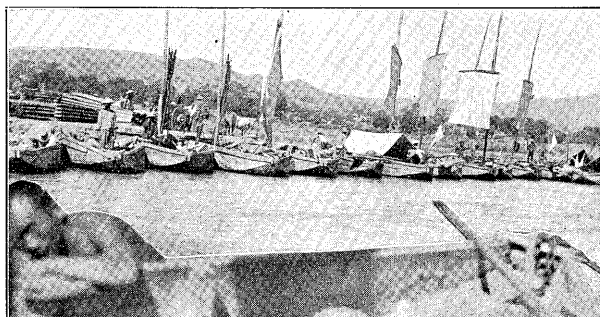


Fig. 52. [A] 灤河下リヲ待ツ輕舟ノ帆風（著者撮影）

ニ獅子嶺、大黑山ガ枕スルト云フ、山河ノ布置ニ到ル迄正シク京都デハナイカ。

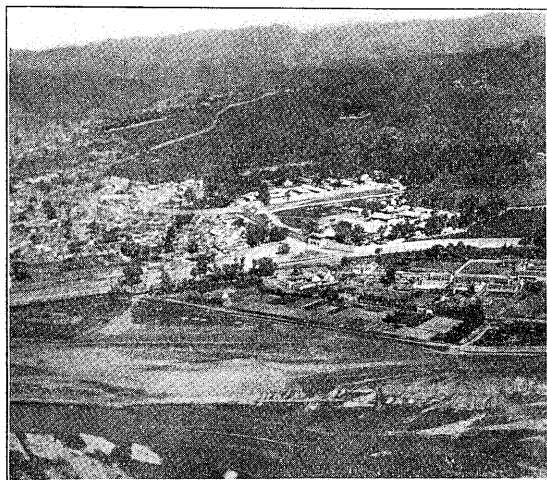


Fig. 53. [B] 機上ヨリ見タル承德離宮ノ正門 (著者撮影)

トシタ嬉ビデアラウ。コノ離宮ハ滿洲事變當時ニハ湯玉麟ノ居城トナツテキタガ、川原挺身隊ノ息モ繼ガセヌ急追ヲ浴ビテ、風ヲ喰ツテ逃ゲ去ツタコトハモツケノ

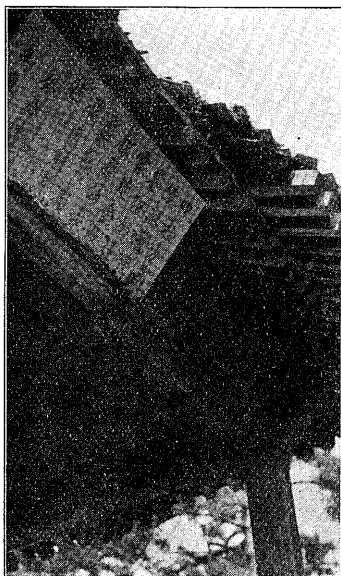


Fig. 54. [C] 御題ヲ掲ゲル離宮内小丘上ノ亭 (著者撮影)

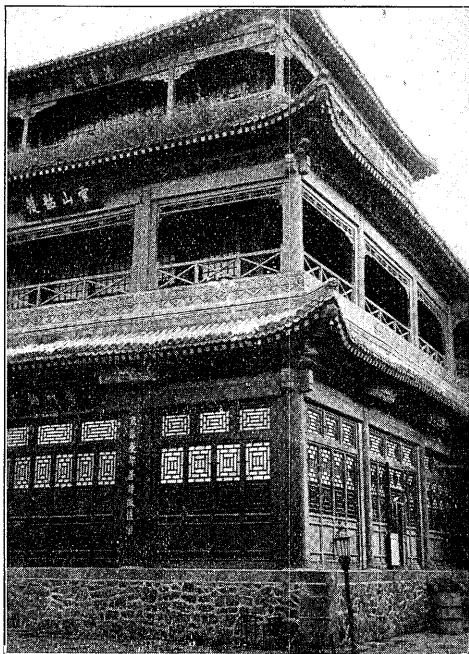


Fig. 55. [D] 離宮ノ正殿清音閣 (著者撮影)

筆者等ノ承德ニ於ケル觸手ハ先ヅ離宮ヘト動イタコトハ言フ迄モナイ。同所ヲ訪フテ特ニ考ヲ新タニシタコトハ其ノ宮殿ノ結構モサルコト乍ラ、職掌柄先ヅ庭内ノ生物相ノ豊富サニ就イテミアル。熱河ノ他ノ地方ハ、漢蒙兩民族ノ飽クコトナキ亂伐ニ禍ヒサレテ、今ハ見ル影モナク荒廢ニ歸シテキルガ、コノ一角ダケハ動亂ノ巷ニ超然タル外國租界ノ如ク凡ユル危離カラ免カレテ、今モ昔々ラノナゴヤカサヲ漂ハシテキル。之ハ何

幸デアツタ。御蔭デ池邊ノ蓮花ノ一瓣スラモ害ハズニ事済ンデキル。戦ハズシテ勝ツコトガ兵ヲ用フル上々ノ方法デアル所以ト痛感シタ。今デハ第○師團司令部ガ此處ニ置カレテ居リ、祕園ノ管理モ充分ニ行キ届イテハキ

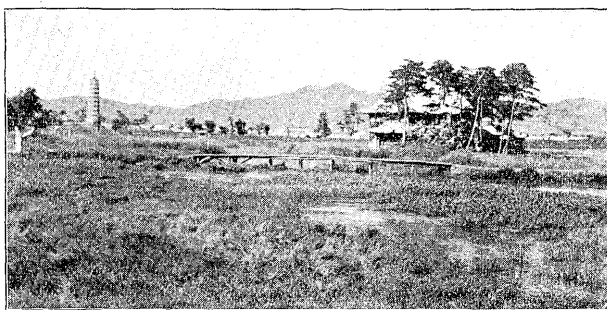


Fig. 56. [K] 綠綾ナス喇嘛塔ヲ配スル離宮内池畔ノ風光（著者撮影）

ルモノ、何シロ其ノ周圍ハ十六支里ニモ及ブコトトテ、裏側ノ山地ニ面シタ城壁ヲ乗り越エ夜陰ニ乗ジテ放飼ノ雄鹿ノ袋角ヲ狙フ輩ハ絶エナイサウデアル。何デモコノ袋角ヲ削ツテ嚙下スルト某處ノ病ニ特效アルトカデ、承德市中ノ藥種商デモ、可成リ高價ニ取引キサレルサウデアルガ、其ノ大部分ハコノ種ノ密獵物ダカラ始末ガ悪イ。

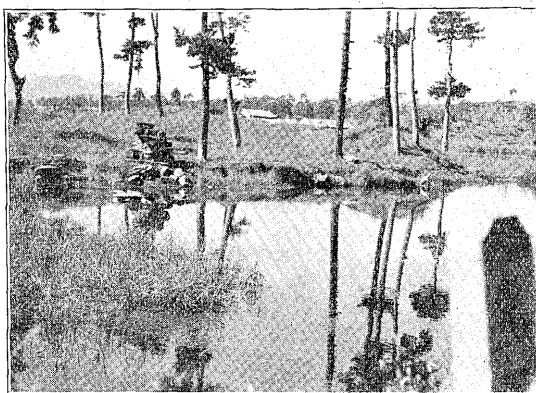


Fig. 57. [F] 熱河ノ語源トナツタ熱河泉ノ標石ト池水ニ影ヲ寫ス滿洲黑松（著者撮影）

離宮ノ正門ヲ潜ルト、先ヅ滿洲黑松ノ梢ヲソ、クサト飛ビ去ツタかさゞギノ鳴キ聲ハ彼等鳥類二百年來ノ夢ヲ引キ裂ク警聲デアツタカモ知レナイ。ヤガテ池畔松蔭ニ舉ル銃聲ハ嚮頃來聞キ馴レタ人殺シ用ノソレトハ響ガ違フ。パツト飛ビ散ル落花ノ如キムクモニ、早クモ變異ヲ聞キ傳ヘタカ、池中ノ魚マデガ永底深ク影ヲ沒シテ、今ヲ盛リト咲キ匂フ梅花藻ノ繁ミヲ唯一ノ隱家ト身ヲ寄セルノモ隣レデアル。斯クテ離宮内生物相ノ調査陣ハ一齊ニ繰リ擴ゲラレタ。

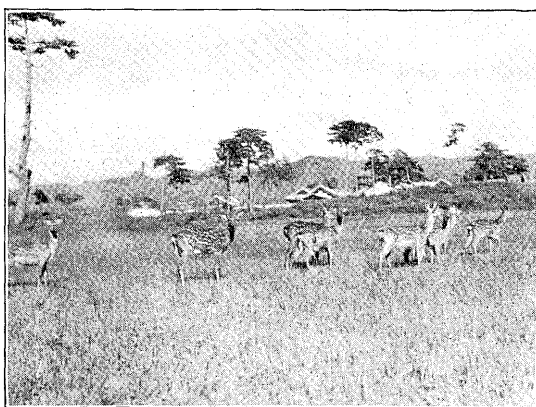


Fig. 58. [L] 秋鳥ヲ脊ニ池畔ヲ逍遙スル鹿群（著者撮影）



Fig. 59. [G] 蓮花ヲ咲ク離宮内池畔ノ小亭。(著者撮影)

ト言ヘバ勇マシノ限リデハアルガ、調査サレル身ニナツテ見レバ、カード一枚デ事済ムヤウナ國勢調査トハチト譯ガ違フ、一々皮ヲ剥レタリ、アルコール漬ニサレタリスルノデアルカラ、御迷惑ノ程ハ重々オ察シ申シ上ゲルノデアル。併シ銃ヲ棄テ、筆ヲ執ル段トナレバ、餘リ正直ニ書クコトモ依リケリデ、成ル可ク血腥イコトハ遠慮スル方ガセメテモノ^{インドウ}引導渡シタルデアラウ。ソコデ殿中デ抜き放ツタノハ竹光トイフコトニシテ置カウ。兎モアレ、山ニ木アリ、原ニ花アリ、池邊ニ水鳥ノ遊ブ風勢ハ何ト言ツテモ熱河ノ「オアシス」デアル。其ノ内デ特ニ筆者ノ興趣ヲ惹イタモノノーツハ鹿ト鳥秋トノ共棲生活デアル。鳥秋ト云フノハ燕大^{オウチュウ}ノ純黑色ノ小禽デ、鹿ノ背ノ密毛中ニ寄生スル或ル脈翅類ノ幼蟲ヲ好ンデ啄食スルタメニ鹿ノ方デモ背中ノ厄介拂ヒト心得テ、細イ目尻ヲ更ニ細メテ歡迎スルノデアル。一、二羽ノ鳥秋ヲ載セテ池畔ヲ逍遙スル鹿群ノ平和ナ姿ハ熱河繪巻物ノ隨一デアルト言ヘル。コノ種ノ共棲生活ハ日本デハヤどかりトいそぎんちやくノ間ニ良ク見ラレルコトハ先刻御存知ノトコロデアルガ、又纏頭滿都ノ心アル「ファン」ノ關心ヲツナイダ動物生態映畫デ「スラダンク」及ビ「バブーナ」ト題スルモノガアツタガ、一群ノ野象ヤ麒麟ノ背ニ、矢張りコノ種ノ鳥ガ群ツテキルノヲ見掛ケタ。長イ鼻ヤ首デモ届カヌ隅モアルカト、微苦笑ヲ禁ジ得ナイノデアル。

次ニ池中ニハ鱧魚ト言ヒ、又文魚、黒魚トモ言ハレル魚ガ居ル。其ノ泳ギ振リハ全ク振ツテキル。筆者ハドウイフ前世ノ因縁カ、汽車ノ出ル時^{トレ}ノ機械ノ動キ工合ガ面白クテ子供ノ時カラ肝心ノ見送り人ヲソツチノケデ機關車ニ見惚ルコトガ良クアルガ、鱧魚ノ泳ギ振リハ正シク其ノ際ノ「ビストン」ノナメラカナ滑リ方ト全ク同ジデアル。其ノ上コノ魚ハ體側ニ青味ヲ帶ビタ暗黒色ノ斑紋ガアリ、體形ノ丸味ノ工合ト云ヒ、鱗ノ鮮カサト言ヒ、蛇ソコメケノ「グロ」味タツブリノ代物デアル。併シ其ノ味ハ見掛トハ違ツテ又格別デ夏ノ洗ヤ吸物ニハ持ツテ來イノ材料ダサウデアル。コノ味モ生ヲ見タ上デ讚ラレルヤウニナレバ確カニ勇士ノ稱號ニ値スルカモ知レナイ。何デモコノ魚ハ戸籍面ダケデハナシニ絶對ニ一夫一婦デ、産卵期ノ五月頃ニハ池邊水草ノホトリニ相携ヘテ來リ、水草枯葉等ヲ丸メテ徑三尺バカリノ巢ヲ造ツテ産卵シ、ヤガテ仔魚ガ自由ニ游泳スル迄ハ共同監視ヲ怠ラヌトイフ。顔ニハ凡ソ、似ツカハシカラヌ程ノ情愛濃カナ魚デアル。

又植物ハ植物デ「熱河ニモ」ト言ツタ類ノモノガ數々トアル。先ヅ第一ニ舉ゲネバナラ

ヌノ淡水植物群落ノ展開デア
ル。菱ヤおもだかモアリ、蓮花
モアツテ、コレガ日本ノソコイ
ラデハ塵埃燒却所裏ノ沼池ニモ
生エテハキルガ、沙漠ヲ想連ス
ル熱河デハ稀ラシキモノノ限リ
ト言ハネバナラナイ。又えぞの
みづたで梅花藻等ノアルトコ
ロ、流石ニ冬ノ寒サヲ物語ツテ
キル。池畔ノ楊柳ハ午睡ノ翳ニ
恰好デアルシ、丘ノ滿洲黒松ニ
通フ松籟ハ大和心ヲ呼び起スニ
充分デアル。但シ其ノ下生エニ
ハ曰ク附キノにんじんぼくガ優
占的デアルノガ氣ニナル。コノ
植物ハ落葉小灌木デ内地デモ時
タマ栽植サレルシ、七八月ノ候
ニ咲ク淡紫色ノ穗狀花ハ可憐ト
ハ云ヒ難イニシテモ何モ白眼視
スルニハアタラヌト思ハレル
ガ、熱河デハサウ簡單ニ片附ケ
ラレナイ。其ノ葉ニハ一種ノ苦
味ヲ有スルタメ、家畜ト言ハズ
一般草食動物ハコレヲ敬遠ス
ル。ソコデ「虎ノ威」ナラヌ、羊
ヤ山羊ノ威ヲ借りテ、山野到ル

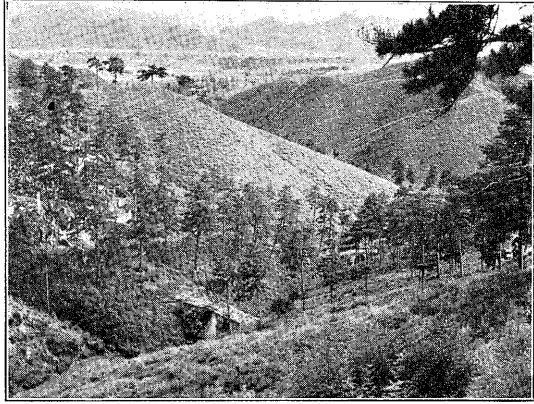


Fig. 60. [1] 離宮内ノ丘ヨリ武烈河畔ヲ望ム、右下ノ小灌木ガ
にんじんぼく (著者撮影)

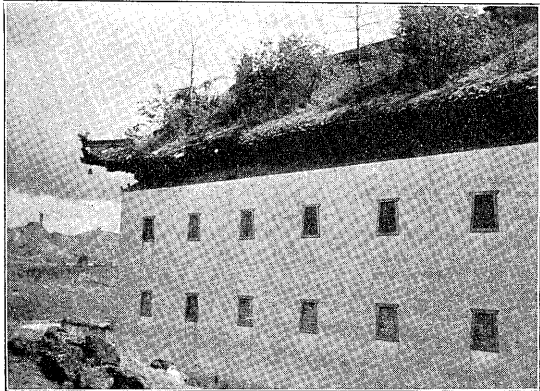


Fig. 61. 荒廢セル喇嘛寺屋上ニ生エ列ブ幼樹 (著者撮影)

處ニ跋扈シテ南熱河ノ大半ヲ被フニ至ツテキル。實際「千里ノ堤モ蟻穴」ヨリノ諺ノ如ク、
羊ヤ山羊ノ胃袋ダトテ熱河ノ植物分布圖ニ關係アルトコロ、「風吹ケバ槽屋ガ繁昌スル」ド
コロデハナイ。論ヨリ證據承德附近ノ喇嘛寺ノ荒廢シタ屋上ハ幼樹ニ取ツテハ唯一ノ安息
所ノ觀ガアル。何故ナレバ、附近ニハ成樹ハアツテモ幼樹ハ芽ヲ出スソバカラ食ヒ盡クサ
レテ、少クトモ彼等家畜ノ口腹ノ届ク範圍内ニハ認メルコトガ出来ナイ。

今ハコノ可憐ナ幼樹ニトツテ唯一ノ寄ス家トナツテキル以外ニハ、コレト云フ役目ヲ持タ
ヌ、喇嘛寺モ、清朝華カナリ昔ヲ偲ブモノニハ在リシ日ノ佛ヲ浮ベル絶好ノ紀念塔デア
ルニ違ヒナイ。中デモ承德離宮ノ外壁ニ沿フテ流レル武烈河及ビ其ノ一支流、獅子溝ヲ距テ、
甍ヲ連ネテ立チ列ブ八大寺ノ壯觀ハ、我ガ京都ガ東西本願寺ヲ始メトシ、三十三間堂、清水
寺、相國寺サテハ東寺ノ五重ノ塔ヤ金銀閣寺ヲ數ヘ舉ゲテモ未ダ及バヌ程ノ豪華振リデア

ル。曾テ「スエーデン」ノ探險家「スーフェン、ヘデイン」氏ガ「アメリカ」ノサル億萬長者カラノ依頼ヲ受ケテ其ノ建築美ヲ「シカゴ」郊外ニ移ス目的デ視察マデシタコトガアルガ、誰ガ見タトテ見ル目ノ良サニハ變リハナイ。イヅレハ滿洲國國寶ノ樞要部ヲ築キ上ゲルコトハ疑モ入レヌ事實デアル。丘陵ヲ利用シテ西藏風ノ城廓ニ積ミ上ゲタ魔天樓や、伊型式其ノマ

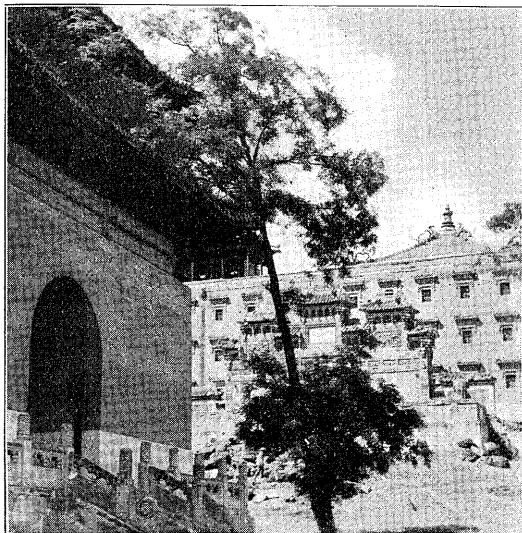


Fig. 62. [P] 金色ノ飛龍妖魔ヲ振フ須彌福壽ノ廟 (著者撮影)



Fig. 63. [H] 普陀宗乘之廟ノ大觀 (著者撮影)

トイフ、微ニ細ニ巧ヲ凝ラシタ利犁廟や「ルーフガーデン」ノ隅々ニ亭ヲ設ケテ帽錐山ノ奇岩ヲ中心ニ展開サレル武烈河畔ノ朝夕ヲ恣ニスル須彌福壽之廟ノ大本山振リ等ハ、當時ノ活佛ノ羽振ヲ物語ル豪華版ノ筆頭デアル。更ニ屋上四頭ノ飛龍ヲ放ツテ、金色ニ塗リ上ゲタ三層樓ハ、薄黒ク禿ゲタ金閣寺ノ壁ト思ヒ較ベテ、「ゴールドラツシュ」ノ折カラ其ノ金箔ノ厚サガ氣ニナル位ニ燦々タル光ヲ發シテ妖魔ヲ睨睥シテキル。兎ニ角讃嘆ノ言葉ヲ用ヒ馴レヌ筆者ハ一苦勞サセラレル。又一堂ノ高サカラ云ヘバ大佛寺ニ及ブモノハナイ。高サ七丈八尺ノ千手觀音ノ立像ト言ツタダケデハ「ピント」來ナイカモ知レナイガ、奈良ノ大佛ガヤオラ腰ヲ起シテ、歩キ出シタ位ト言ヘバ良ク呑ミ込メル。コレガ世界第一ノ木彫像ト云フノデアルカラ康熙、乾隆ノ御代ノ隆盛サガ彷彿トスル。數ノ點デ又表情ノ巧ナ點デハ羅漢寺ノ五百羅漢ハ正シク驚異ノ的デアル。日本等ノ御座ナリノ五百羅漢トハ少々撰ヲ異ニシテキル。

兎モアレ角モアレ、往時ハー時ニ數千ノ喇嘛僧ヲ擁シタ寺々

モ、幾度カノ戰禍ニ堂宇ハ朽チテ傾
キ、處々ニ雨漏リスルナド哀レヲ誘
フ種子デアル。然モ今デハ 數人ノ
「ルンペン」僧ガ信者モナイ朝タヲ見
物人ノ喜捨ニヨツテ僅カニ露命ヲ繼
イデキルノミデ、寺寶ハ次第ニ逸散
スルシ、堂宇トテモ荒レルニ任セル
外ニ道モナイ始末デアル。考ヘテ此
處ニ及ブ時、滿洲國デ今回皇帝御訪
日紀念事業トシテ、又其ノ御先祖ノ
偉業ヲ繼承スル意味ヲ含メテ一
大改修ノ工ヲ起サレルコトヲ切望シテ
止マナイモノデアル。

（昭和十年四月稿）



Fig. 64. [Z] 世界一ノ木彫千手觀音（著者撮影）

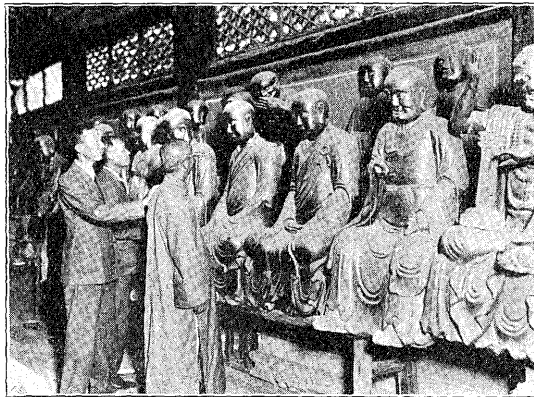


Fig. 65. [X] 見ル羅漢、見ラレル羅漢